

花の歌 歳時記

前田康子

どんぐりの帽子をかぶせたり、ぬがせたり。しゃがんで、そんなことをしているうちに、秋の日暮れは終わってしまふ。小学校の生け垣がどんぐりの木だったことを思い出す。

どんぐりも種類別にいろいろな表情を持っている。一番上品な感じがするのが、マテバシイ。細長く大きく、飾っているといい感じだ。どっしりとしているのはクヌギの実。真ん丸で、帽子も大きく派手。スタジイは煎って食べるとおいしいらしい。

シリブカガシというどんぐりは、手のひらや服の裾で、しばらく磨いていると、アーモンドが入ったチョコレートのようにつやつやでびかびかになる

京都の植物園に行くと、どんぐりの時期は、ビニールの袋にぎっしりと、いろいろなどんぐりを集めた子供たちに出会う。独楽ややじろべえにしたり、穴をあけて笛を作るのも楽しい。そんな子供達を私はドングラと呼んで楽しんでる。



絵・オリーブ／小柳吉次

水引

水引は秋の寂しい花の一つである。ぼつぼつとついでる花は、触れるとすぐに取れてこぼれそうである。水引の赤い花は本当に小さいけれど、くつきりとした紅の色だから咲いているとよくわかる。

秋は咲く水引草に吾亦紅荒野のみちを人の過ぎゆく

岡 麓『雲間草』

荒野という言葉に、現在では懐かしさを感じる。水引や吾亦紅や、さまざまな草花が入り交じった荒野。そこを誰かが通りすぎて行く。旅人であろうか。

目覚めれば病臥のわれをさしのぞくかば
そき朱のみづひきの花

上田三四二『鎮守』

病臥の心細さ。それが窓の外の水引にも感じられて哀れである。水引は、葉が低い位置にあるが、花をつけた茎の部分は、いろいろ

な方向に向かって、弓形に伸びている。「さしのぞく」という感じがよくわかる。

水引の紅みえがたく、ふれがたくそこより
秋のまなことなれる

雨宮雅子『悲神』

水引の花の茎の細さ、それに触れていいものは、秋の風だけかもしれない。水引の紅を見た眼、それはもう秋の眼となってしまった。眼は秋の切なさを知ってしまった。

花をはりたる杜鵑草水引をねぎらふと聴

け小夜中の雨

伊藤一彦『森羅の光』

杜鵑草も水引も、以前住んでいた家に咲いていた。杜鵑草は紫色の斑点のたくさんついた、美しい花である。水引は白い花の銀水引も一緒に咲いていて、何か縁起のいい感じがした。

金水引という花もある。水引とはまったく違うバラ科の花で、黄色い色をしている。同じ頃に咲く。



みづひき
水引



紫苑

紫苑という名は、何となく野菊のような柔らかい花を思わせる。だから初めて見たとき、イメージと少し違っていた。

茎は太く毛が生えてざらざらしている。花もたくさんつき、背が高い。自生しているものは見たことがないが、庭先などに植えられているのをよく見かける。

ささやきを伴ふごとくふる日ざし遠き紫苑をかがやかしをり

相良 宏『相良宏歌集』

いわれてみれば、紫苑は光の中に高く輝いて咲いている。それは夏のきつい日差しではない。この歌のような細やかな秋の日差しの中に咲いている。

相良宏は病のため、三十歳でこの世を去った。「夕木立透きて黄にてる花あればうすき布団を引上げ眠る」というような透明感のある歌を多く残している。

道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ

大西民子『野分の章』

紫苑は大きいものなら二メートル程になる



おん
し 紫苑

という。遠くに咲いていても、花はてつぺんにかたまつて咲いているのでよく見える。コスモスのように、少々の風に揺れないどころか、台風ほどの風にも強いらしい。

丈たかく紫苑の花のさける見て日の余光ある坂くだりゆく

佐藤佐太郎『歩道』

紫苑の花を見た。そして残照の中の坂道を下っていった。ただそれだけなのに、人生の一部が見えてくるような歌である。

(まえだ・やすこ「塔」会員)